

月例研究会（2005年1月26日）

日本における民主主義の現在

平和・民主主義・人権をめぐる対抗の現段階

五十嵐 仁

この報告は、当初予定されていた報告者のピンチヒッターとして、急遽なされたものである。たまたま標題の論攷を『歴史評論』05年2月号に発表していたからだ。したがって、報告の構成や内容についての詳細は、この論攷をご覧いただきたい。

本稿は、平和・民主主義・人権が大きな危機に瀕しているとの現状認識に基づいて、なぜこうなったのか、何がどのように変化したのかという問い合わせを課題としている。そのために、1980年代以降の歴史的な推移を振り返り、アメリカの変化、日米関係の変化、日本の変化、マスコミの変化、国民意識の変化という5点について検討した。

討論の中では、「冷戦」に勝利した90年代におけるアメリカの分析が十分ではない、90年代の国民生活や大衆社会状況の深まりという社会的背景をもっと重視すべきだ、民主主義の擁護という点では若者の価値観や意識のあり方が重要なのではないか、「虚偽イデオロギー」という用語には違和感があり、避けた方が良かったのではないか、などの質問や意見が出された。どれも重要な指摘だと思われる。

なかでも、「対抗の現段階」という副題でありながら、労働運動や社会運動など、民主主義を守ろうとする勢力の側についてはほとんど取り上げられていないのではないか、という鋭い指

摘があった。大原社研らしい問題指摘だと言えるだろう。

確かに、この論攷は、いわば民主主義に対する攻勢の推移とその背景についての大まかなデッサンにすぎない。したがって、指摘されたように、「対抗の現段階」を全面的に明らかにするという点では不十分なものとなっている。このことは、本稿の執筆を依頼されたときから私としても自覚していた。

そのため、依頼されたテーマを副題とし、新たに「日本における民主主義の現在」という、いささか茫漠とした表題を掲げたわけだ。「対抗の現段階」を正面から記述するのは手に余り、いわばそこから“逃げた”わけだが、研究会ではすかさず捕まってしまった。

ただ、本稿でも「かえってこのような攻勢の強まりは、一方では、破壊しようとする勢力に一定の矛盾とジレンマをもたらすことになり、他方では、抵抗のエネルギーを蓄積しつつある」と指摘している。「抵抗」についても意識しなかったわけではないが、これだけのスペースではとても展開できない。

この『歴史評論』の論攷でも依頼枚数をオーバーしてしまい、かなり削ったという経緯がある。しかし、十分な枚数があれば「抵抗の現在」についても書けたとは限らないが……。

一応、今回の論攷で「攻勢」についてのデッサンを書いたので、いずれは「抵抗」のデッサンを書かなければならないということかもしれない。これについては、今後の課題とさせていただこう。

（いがらし・じん 法政大学大原社会問題研究所
教授）